

人生100年

くらしのとなりに seikatsu@asahi.com

入居者の笑顔守りたかったのに

ケアワーカーがいなくなる?

2

「こんな私が、介護をやってちゃダメだと思っんです」
母校の恩師にそう告げると、涙が止まらなくなった。

2016年7月、日向野由佳さん(27)が埼玉県内の特別養護老人ホーム(特養)で働き始めて、2年目の夏を迎えていた。

その日、入居者のトイレを介助していた。別の入居者が日向野さんの名前を呼ぶ声が何度も聞こえた。トイレに行きたいと訴えていた。

「ちょっと待っててね」
——また、この言葉を言ってしまった。

本日は待たせたくない。しかし、ほかに頼める職員はいない。だから、「ちょっと待って」が口をつくことは、それまでも何度もあった。あとで「何度も呼んでごめんね」と謝られたこともある。



介護職員として働いていた当時の日向野由佳さん=本人提供

何度も「ちょっと待って」…自己嫌悪 理想の介護とギャップ 3年で退職

かもしれない。

短大の介護福祉科で2年間教わった岡田圭祐さん(45)のもとに、車を走らせた。話を聞いてほしかった。

「少し休憩してみたら?」
また走り出せばいいんだし」
恩師の言葉に、少し気が楽になった。しかし、長くは続かなかった。

この特養では70人ほどが暮らす。短大では、高齢者の意思や意見を尊重することが大事だと学んだ。すぐ対応してほしいと思っっている入居者を待たせることは、こうした考えに反する。できるだけ待たせないよう心がけていた。

実際には、手が回らないこともしばしばだった。

特に、夜勤の時間は職員も3人だけと少なく、あちこちの部屋からナースコールで呼ばれる。「ちょっと待ってよ!」。忙しさに、口調まできつくなってしまう。

トイレに付き添ったばかりの女性入居者にナースコールで呼ばれ、湿布を貼ってほしいと頼まれた。それを終えて居室から出ようとすると、また名前を呼ぶ声が聞こえた。

「また?」
つい、舌打ちをした。
やばい、と思った。



子どもと一緒に恩師の研究室を訪ねた日向野さん(左)。近況や将来について岡田圭祐さんと話が弾んだ=さいたま市の浦和大学

お年寄りにイライラするなんて。反省して落ち込み、自分のことをいやになるにつれて、心身ともに疲れが抜けなくなっていく。

同僚や先輩には悩みを打ち明け、上司は「サポート態勢を考えよう」と言ってくれた。しかし、人手を増やすわけにはいかないようだった。

日向野さんには、めざすべき理想の介護があった。入居者が人生の最期のときまで笑顔で過ごせること。その最期まで一緒に過ごせることを自身が誇りに思えるような仕事をしよう。

でも、現実とのギャップは埋まりそうにないと思った。

3年たつまではがんばろう。そう決め、実際に18年3月に退職を届け出た。慰留にも決意は変わらなかった。

それから4年半。
結婚し、昨年、娘を出産し

た。育児に余裕ができたなら、復職も考えているという。

「介護の仕事が、嫌いなになったわけじゃないんです。お年寄りと話するのは楽しいし、もう少しゆっくり向き合える時間があったら、あとは待遇がよければ、続けられていたと思います」

勤めていた特養では当時、1年目の基本給は月14万円ほど。3年目、夜勤などの手当を含めても月20万円には届かず、実家を出て職場に近いところで一人暮らしすることもできなかった。

日向野さんが学んだ浦和大学短期大学部(さいたま市)は、入学者の減少で今年3月に閉学となった。いまは浦和大学で教える岡田さんは「プロ意識が強いほど理想と現実の違いに悩みやすい」と言う。介護職で働く卒業生が悩みを抱え込まないよう、「ホ

ームカミングデー」を設けるなど相談できる場所の提供を心がけているという。

事業所6割「人手不足」 離職に影響

公益財団法人・介護労働安定センターの調査(2021年度)では、介護労働者の働く上での悩みや不安は「人手が足りない」(約52%)が最多。介護労働者のうち前職も

介護関係だった人が、前職を辞めた理由は「職場の人間関係」(約25%)が最多だった(ともに複数回答)。

全国老人福祉施設協議会の介護人材対策委員長、太田二郎さん(67)は、「人間関係に悩んで辞める背景には、人手不足でコミュニケーションをとる余裕もなく疲弊している現状がある」と話す。

同センターの21年度の調査によると、事業所の約63%が従業員が「大いに不足」「不足」などと「不足感」を訴えていた。介護職員と訪問介護員を合わせた1年間の離職率は14.3%。前年度(14.9%)を下回り、厚生労働省の

調査による全産業平均(21年は13.9%)を大きく上回るわけではない。ただ、太田さんは「新型コロナウイルスの影響で他産業の雇用も厳しく転職しづらい面もあった」とし、楽観はできないとみている。

人手不足を解消するため、同協議会は3年前、介護の仕事を辞めた人を呼び戻そうと復職支援プログラムを始め、参加者は計196人、実際に復職した人は数人にとどまるとみられ、「効果は道半ば」。人材の定着を図るため、中堅層やリーダーの研修などにも取り組んでいるが、「解決策は見いだせないのが現状」と言う。(森本美紀)

◇「ケアワーカーがいなくなる?」の次回は12月1日に掲載する予定です。